

土に眠る(4)

【4】

ミヤちゃんが帰ったことが、ナオミにはとてもつらかった。とうとうおいてきぼりにされた、と思った。ユミも帰りた。こんな寒いところで雪にうもれて、ひとりぼっちでフランス語に押しつぶされているのはいやだ、お腹の底からそう思った。日本に帰るミヤちゃんが、口では言えないほど羨ましかった。デイジョンの駅まで送って行って、列車に乗ろうとするミヤちゃんを、ユミは思い切り抱きしめた。ミヤちゃんもユミにしがみついていた。ふたりはぜんぜんちがう考え方をして、ぜんぜんちがう種類のニンゲンだったけど、でもこの数か月、ふたりだったからやってこれたのだと思った。

駅から寮へ戻ってからも、ユミはときどき涙ぐんだ。自分のことを、たった一人で島流しされたみたいだと思った。この後、ちゃんと耐えていけるか自信がなかった。

その翌日だった。久しぶりにミサキさんから電話があった。

「どう？ 元気にしてるの？」

ミサキさんの声はあいかわらずそっけなくて、こちらの返事を待っているようでもなかったけど、ユミはそう聞かれたことがしみじみうれしかった。

「復活祭の予定はある？ もしないんだったら、いっしょにプロヴァンスに行こうよ」

もちろん予定なんかなかった。復活祭がどういうことなのかも知らなかったし。プロヴァンスなんて、聞いたことあったか、なかったか。でもユミはよろこんで行くと言った。出発は来週だとミサキさんは言った。

次の週末、ミサキさんは約束どおりにデイジョンまで来

土に眠る (4)

てユミを乗せると、
「まずはマルセイユだね。ともかくも地中海に向かって
まっしぐらー！」

と言った。地中海なんて、まるで映画か小説みたい、と
ユミは思った。プロヴァンスへ行くのだとは知っていたけ
れど、それがつまりは地中海だということは、あまりわか
っていないかった。

そういえば、ほんとに長いあいだ海を見ないでいた。そ
のことに、やっと気がついた。デイジョンで過ごした冬の
閉塞感は、もしかしたら海を見ないせいだったかもしれない。
い。

内陸のデイジョンは水の少ない土地だった。川もない。
町はずれを流れている川のようなものは、じつは運河で、
馬車の揺れを好まないブルゴーニュ・ワインを輸送するた
めに人工的に作られたのだ。昔は底の平たい舟にワインを
載せて、川岸から馬が曳いて行ったそうだ。波ひとつない

水面は、のどかな秋の日の眺めとしては悪くなかったけど、
冬空の下ではかえって物悲しきをつのらせる。

マルセイユで海を見た瞬間、ひどく懐かしいものに再会
してみたように、暖かくて柔らかいものが胸の奥からこみ上
げてきた。といっても、ユミが育った湘南の海とはぜんぜ
ん違って、夕陽に照らされた狭い港を小さな船がごちゃご
ちゃと埋め尽くしている。まるで駐車場かバスターミナル
のような海だった。海も陸もすごく活気がある。ありすぎ
る。でも、うん、こんな海も悪くはない。

波止場に立つと、ミサキさんは両手を広げて、

「うわーい、海だあ」

と叫んだ。ユミは度肝を抜かれ、ついでにちよつと恥ずか
しくてこっそり周りを見たけど、だれも気にとめてない。
ようだ。というか、ここではあたりじゅう、みんなが大声
で叫んでいるので、ミサキさんの声も聞こえなかったのか
も。

土に眠る (4)

「海、いいなあ。気持ちさが晴れ晴れするよねー。だから、あたし、岬っていう名前にしたんだ」

「え？ ミサキさんのミサキは、海の岬なの？」

「そうよお、海に突き出ている岬。潔くて、孤絶してる感じ、いいでしょう？」

「そういうえば、どういう字を書くのか、いままで知らなかった。ミサキさんのお父さんの田代さんがくれたパリのアドレスには、ローマ文字でミサキ・タシロと書いてあった。知らなかったけど、なんとなくカタカナじゃないかという気がしていた。それにしても、自分でそういう名前にしたというのには、どういうこと？ だって、お父さんの田代さんも「ミサキは……」って言ったのにな？」

「自分で自分の名前つけたの？」

「うーん、ほんととはね、美しいという字と、花が咲くっていう字なの。美しく咲くようにって思ったんでしょ。でもさ、あたし、そういう親心って、ちっと気恥ずかしいのよ

ね。親が願うのは勝手だよ、けど、それをおでこに張り付けて生きてくのって、なんかみっともないと思わない？ それに似合わないじゃない、あたしに。美しく咲くなんてさ。で、岬にしたの、自分だけで。フランス人に意味を聞かれたときも、海に突きだしてる岬のことよって言う。そういうことにしたら、すっごく気分が変わった。なんか、よけいなことくよくよ考えなくなった。ま、自己改造の一端とでも申しませうか」

「ちよっとふざけたふうにミサキさんは言った。何にも気にしない人のように見えるのは、そうしようど努力してるせいなのかもしれない。」

次の日は午前中マルセイユの雑踏を歩きまわって、午後早めにバスに乗ってエクス・アン・プロヴァンスの郊外の田上さんという人の家へ行った。車だと安心してワインも飲めないし、家を探して知らない道で迷うのは嫌だからね、とミサキさんは言った。

土に眠る (4)

行き当てたのは、閑静な住宅街にある、思いの外におしやれな家だった。玄関まで出迎えた田上さんはミサキさんと抱き合い、「サリュユ！」と言いなながら頬っぺと頬っぺをすり合わせた。まるでフランス人みたい。

その後で田上さんは、そばに突っ立っているユミを、あれっという目で見た。

「あたしのサンチョ・パンサ。ユミっていうの。よろしく」
ミサキさんがこともなげに言い、田上さんは「フン」とうなづいて、それですべて終わった。ちゃんと挨拶するつもりだったのだけど、ユミが頭を下げようとした時には、もう二人ともむこうを向いていた。シャルルドゴール空港の初対面で挨拶しそびれたときとおなじだ。

デイジョンからの車の中でミサキさんが話してくれたところによると、二人は同じ年度の留学生だったらしい。ミサキさんは音楽、田上さんは油絵だったけど、じっさいの勉強が始まる前のひと夏、いろんな分野の留学生が集まっ

て、いっしょに語学研修をする。そのときの仲間だった。

田上さんはハナから留学先をプロヴァンスに決めていた。

「なにしろセザンヌ、セザンヌの人だから。」

セザンヌが好きだと、プロヴァンスでなくてはだめらしい。で、研修が終わったとき、二人はパリとプロヴァンスに別れたのだけど、田上さんが用事をつくって時々パリに行く。そのときは何かにつけてミサキさんを頼るのが決まりだった。

「いちどプロヴァンスに来てうるさいからさあ」

と、ミサキさんは車の中でほんとにうるさいと言った。

リビングとおぼしき部屋に入って、熱いコーヒーでやっ
と一息ついたと思ったら、

「ね、絵を見てよ」

待ちかねたように、田上さんがアトリエに誘う。

「ええー、まだコーヒー残ってるよお」

ミサキさんは、ちよっと渋ったけれど、田上さんはもう

土に眠る (4)

立ち上がっている。画家って、こんなに自分の絵を見せた
いものなのだろうか。

小さなリビングに比べると、アトリエはかなり広がった。
でもあたりじゅう雑然と物が散らばっているうえに、やた
ら天井が高く、片方は一面のガラス窓。しかも陽が射さな
いので、なんか寒々としたかんじだ。少なくともナオミ好
みの部屋ではない。

田上さんは壁に立てかけてある何枚もの絵をのぞき込ん
だり入れ替えたりながら、「これは違う、あれ、どこいった
かな、あ、まあこれも見せようか」独り言を言って、最終
的に四枚ほど選び出して、二人の前に並べた。どうも会心
の作であるようだった。

ミサキさんは腕組みをして、神妙な顔つきで絵の前に直
立している。そのミサキさんの横顔を、田上さんはじっと
窺っている。ナオミはミサキさんの斜め後ろから、その二
人のようすを半々に見比べている。

「うーん、あたし絵は分からないからねえ。でも、ちよっ
と色が変わったような気がする」

ミサキさんの言い方はいかにも当てずっぽうだ。どう変
わったのか、具体的なことは何も言わない。

「そう、鮮やかになったでしょ？ やっぱり、ここの風土
のせいだと思うな」

「やっぱり絵も土地で変わるの？ 音色は空気でぜんぜん
変わるけどね」

「うん、そうだよ。このブルーなんか、ここへ来てから出
てきた色だもん」

「フルートもね、日本じゃぜったい出せない響きってのが
あるのよ。あれ、なんだろうね、空気が乾燥しているせい
かしら」

「ああ、光かもしれないしね、空気のなかの微粒子が絵の
具から色を引き出すってかんじだよ」

二人は真正面から目をみつめあって、真剣に、熱情をこ

土に眠る (4)

めて語っている。おたがいに自分の関心事ばかり言っていて、話はぜんぜん噛み合っていないような気がするのだけど、でも、おたがいに深く納得し共感しているようなのが、見えていてふしぎだ。人間どうし心が通じ合うというのは、いったいどういうことなのだろう。

絵を見せてしまうと、田上さんはようやく落ち着いたようすで、ワインの栓を抜いた。ほんのりとバラ色の地酒、プロヴァンスのロゼだ。

「ちよつと甘口なんだけど、おいしいんだよ、これ。おれ、ロゼだけはうっすら甘口が好きなの。とくにプロヴァンスはね」

言って、自分は立ったまま、

「チンチン！」

乾杯すると、座らずにキッチンから料理を運んできた。深めの皿に盛ったラタトゥイユの登場。

「お、さっすがあ、プロヴァンス料理じゃん」

艶やかに煮くずれたピーマン、タマネギ、トマト、オリブを見て、ミサキさんがはしゃいでいる。

「あたし、これ大好きなんだ」

舌触りよく適度に冷めたラタトゥイユは、それぞれの野菜の味がしっかり自分を主張しながら調和していて、とてもおいしい。

「すごいね。田上ちゃん、料理なんてできる人だったんだ。知らなかったなあ」

ミサキさんはしきりに感心している。絵を見せてもらったときより、ずっと熱心だ。田上さんは何とも答えず、また頃合いを見て、次の皿を運んでくれた。こんどはハーブを乗せてオーブンで焼いたホタテ貝。それと赤いお米のリゾットも。それから「あ、そうだ。忘れてた」と言いつつ、もう一皿、サラダ・ニソワーズを持ってきた。

ひとしきり言葉少なに食べることに熱中した。それが一段落したところで、田上さんがちよつと声を改めて、

土に眠る (4)

「おれ、フランスに骨を埋める覚悟をしたよ」と言った。ミサキさんはひと声、「ふん」

と発したきり黙っている。二人にとって、重い事柄であるらしいのが、沈黙のなかの緊張感からうかがい知れた。しばらくして、

「骨を埋める、ねえ……。で、奥さんも呼ぶの？」
目を伏せたまま、低い声でミサキさんがいう。

「いや、それは無理だよ。彼女は日本を離れる気はないだろう。仕事も順調に伸びてきてるし」

「じゃ、どうするのよ。別れるの？」

「ん、そのつもり」

河野さんはしばらく黙っていただけが、つと顔を背けると、「初年の夏、彼女フランスに来たんだよ。おれ、どうしても抱いてやるのができなかった」

くぐもった声で、独りごとのように言った。ミサキさん

も黙ったままだ。ちょっと大人の話。なんかナオミが聞いてちゃいけないような気がする。

「でえもなあ、めんどうだろうなあ。話を切り出すことを考えると、気が重いよ」

大きなため息もろとも、田上さんが言う。

「なんだ、じゃまだ具体的な話になってないんだ？ それじゃあ、先どうなるかわかんないな。よく聞くよ、そういうこと。留学して一年も二年も離れてると、身も心も遠ざかっちゃうってなこと。でも、もうだめなのかなあと思っていると、なににごともなかったようにまた仲良く暮らしたりしてるからねえ」

ミサキさんは慰めるような口振りだ。

「まあな。ま、元にもどることはないとは思うけどな、うちの場合」

「たしか資産家だったよね、奥さんち」

「資産家ってほどのことはないけど、でも、これまでずい

土に眠る (4)

ぶん援助してもらったしな。結婚したの若かったから」
色白で細面の田上さんは、きつと女の人にもてるタイプ
なのだ。

「ま、絵といわず音楽といわず、芸術やってたら端に迷惑
かけると決まったようなものよ。それ考えてちゃ何もでき
ない」

ふたりは顔を見合わせて共犯の苦笑い。ゲイジュツカ
なのだ、ふたりとも。

「こどももいないし、オレたち」

「まあね、子はカスガイって言うよね」

ミサキさんはいったんは合わせておいて、
「でも、ほんとうにこどもってカスガイなんだろうかねえ。
いったんだめになった夫婦が、こどものために元の鞘にお
さまってうまくいくんだろうか。夫婦っていうより、男と
女がさ？ こどものために別れないっていう話、よく聞く
けど、ほんとうはこどもを口実にしているだけじゃないの

かな。本心は別れたくないのよ、打算とか世間体とか、い
ろいろで。だいいち、あんたのせいで別れないんだよなん
て、こどもに対して失礼じゃないの」

子はカスガイ。ユミには覚えがある。あの時、ユミは
小学校の四年生だった。おばあちゃんがふつとユミの顔を
見て、「子はカスガイってよく言ったもんだわねえ」と呟い
た。「ユミコがいなかったら、剛だって」と言いかけて、
それきり口を閉ざしてしまった。おばあちゃんは蚊取り線
香に火をつけてるところだった。庭でミンミンゼミがうる
さいほど鳴いていた。その音が、いまでも耳の底で鳴って
いる。

こどもに対して失礼だというミサキさんの言い分はもっ
ともだと、ユミも思う。ほんとに失礼な話。でも、だから
って、こどものことなんか言い訳にしないでよと突っ放せ
るかといえば、そうもいかないのがこちらの弱いところな
んだ。ミサキさんはたぶん、そういうこどもの苦勞をした

土に眠る(4)

ことがないのだろう。

「ミサキ、自分はどうかなのさ。恋人とか、いないわけ？
こんな子連れて女ふたりで旅行なんかしてさあ、しよぼく
れてるじゃないの」

気分を変えてからかうように、田上さんが言う。

「いないわけないでしょうが、こないいい女に」

「お、いるんだあ。日本人？ フランス人？」

「フランス人」

ミサキさんはフン！とでもいいいたげな表情で応える。ダ
カドウダッテイウノサ。照れてるのかもしれない。そう
なのか、恋人がいるのか。

「ふうん、ならどうしてその人と旅行しないの？」

そう、それはユミも聞きたいところ。どうしてユミを誘
ったりしたのだろう、ブルゴーニュのときも、こんども。

「ときどき一人になりたくなるんだ。あんまりべったりさ
れるの苦手なの、あたし。でも、旅行したいなんて言うと、

向こうは当然いっしょに行く気でいるしき。一人になりた
いって、ちよっと言いくいじゃん。で、この子のようす
を見てくるっていうと、黙って出してくれるから。従妹っ
てことにしてあるのよ」

「ふうん。情熱的なんだ、彼」

「ていうか、日本人とフランス人の感覚のちがいじゃない
かしらね。なんか、いったんカップルっていうことになる
と、とことんカップルやっつけないと気がすまないようなの
よね。週末とかヴァカンスの予定だって、相談しないで決
めたら大変よ。いちど大騒ぎだったことある」

「ああ、そういうところあるね。ま、人にもよるだろうけど。
でもさ、男から言うと、逆にフランスの女は、きっちり自
分と相手の区別をつけてるっていう気がするよ。日本の女
はもっとけじめがないな。一心同体っていうのを無意識に
やるかんじ。それが堪らないとも言えるんだな」

「でも、だから可愛いんでしょうが？」

土に眠る(4)

「まあ、状況によってはね。でも気に入らない時や腹立てる時もそうなんだから。いや、そういう時にかぎって、はじめがないんだからなあ」

「はは、かなりウツプンが溜まってるようだ」

ミサキさんは笑った。たしかに田上さんの口調には客観性が感じられないと、はたで聞いているユミも思う。

「それにこの子、とてもつき合いやすい子なの。あっさりしてて無口だし、つまらないことで機嫌わるくなったりしないから。ちょっとボーっとしててるけどね。でも旅行の連れにはもってこい」

「あんなこと言ってるよ。いいのかい」

河野さんがはじめてユミのほうを向いて笑った。黙って頷くだけ。ユミにしてみれば、いいも悪いもあったものじゃない。ミサキさんが誘ってくれなかったら、旅行だつてろくにできやしないんだもの。それにミサキさんは、どうせ一人でも同じお金がかかるんだからと言って、ガソリン

代もホテル代も取ってくれようとしらない。こんなお誘いに文句言ったらバチが当たる。

それでも、無口だったり、感情を出さないようになったのは、それなりの苦労があったからだ、と内心ユミは思う。パパとママのあいだで、いつもそれとなく二人の顔色をうかがいながら大きくなったせいじゃないかな。よけいなことを言わないように、ふたりがユミを見ながらニコニコ笑ってくれて、それで仲のいいふたりでいてくれるようになって、いつも思ってた。それって、けっこうきついことだった。

そのとき、玄関のカギががちゃりと鳴った。田上さんが、「あ、帰ってきたな」

と呟いて、そちらを見やる。と、部屋のドアが開いて、白人の女性が入ってきた。

「ボンソワール！」

その女性は愛想良く、ミサキさんに挨拶した。

土に眠る (4)

「ミシユリーヌ」

河野さんが、その人をミサキさんとユミに紹介する感じで言う。どういう人なのかわからないので、とりあえずにここにこしておく。

ミシユリーヌさんは田上さんの横に椅子を運んできて、座った。

「セテ・コマン・ル・コンセール？（音楽会どうだった？）」

「ア、トレビアン！ オネテ・コンタント（とてもよかったです。満足したわ）」

「彼女、仕事の帰りに友だちと音楽会に行ったの」

ミシユリーヌと交わした短い会話を客のふたりに説明する。説明してもらわなくても、聞いていれば分かることなのだけど、でも、ああ、というふうに頷き返す。

「タ・ファン・ノン？（お腹空いてないの？）」

ミシユリーヌと呼ばれた女性は田上さんから皿を受け取り、テーブルに残っていた料理を食べはじめた。そして、

サラダ・ニソワーズを指して、

「セテパ・トロ・サレ？（塩味が強すぎなかったかしら？）」と河野さんにたずねる。

「アー、ノン！ パデュトウ。セテ・トレ・トレ・ボン（そんなことない。とってもおいしかったよ）」

「ア・ボン？（あ、そう？）」

彼女はつつましやかに答え、それから改めてミサキさんとユミのほうを向いて、晴れやかに笑った。あわててふたりも、口々に「デリシユー」「トレ・ボン！」と保証した。

ホテルに戻る道すがら、

「そういうことだったんだあ」とミサキさんが言った。

「……」とナオミも応えた。

ほかに何と言えればいいのか、分からなかった。ミサキさんは、

「ねええ？」と、ナオミの顔をのぞき込んで、それからふ

土に眠る (4)

たりで声を合わせて笑った。

「フランスに来て日本に帰らなくなるケースって、たいはい裏に女がいるって、聞いたことあるけどねえ：」

ミサキさんはひとりごとのように言っただけで、これには答えられなかった。

その次の日はアルルに行った。田上さんは案内してあげるよと言っただけで、ちょうど土曜日だったので遠慮した。カップルの週末を邪魔してはいけない。

「一人だったら付き合ってもよかったですけど、旅行するときくらい、フランス語使わないでいたよね？」とミサキさんは言った。ユミも、何となくミシユリーヌに気を使っているような田上さんのようすを思い出して、つきあってもらうのは悪いような気がしていた。それに、ミサキさんとの水入らずも悪くない。ドンキホーテとサンチョ・パンサというのは昨日はじめて聞いたことだったが、言われてみればなるほどと思う。つまり一人旅にお

供がほしかったんだ。そういうことなら喜んでお供させてもらいましょ。ユミにとっても、願ったり叶ったりだもん。

マルセイユの街を出ると、風景が変わった。勾配が激しくなつて、ぐねぐね曲がる道の脇に白茶けた崖がそり立ち、強い陽光を照り返している。岩のひだの奥には濃い緑の茂みがあるけれど、岩肌を覆うにはいかにも小さい。水が少ない土地柄なのだろうか。白い岩肌は、まるで地球の骨がむき出しになったみたいだ。でも少しも冷たくない。土地が自分をさらけ出しているというかんじ。

「ああ、プロヴァンスの風景だねー。冬のパリの後では天国。あたし暖かい土地が好きなのよ、ほんとは」

ミサキさんが言う。たしかに。パリは知らないけど、デイジョンとはぜんぜん違う。この光に暖められているうちに、ユミも冬のあいだに縮ぢこまっていた気持ち伸び広がっていくような気がした。

眩しい景色に目を細めながら、ユミはぼんやり田上さん

土に眠る (4)

のことを考えている。田上さんの奥さんは、どういう気持ちでいるのだろうか。辛い思いをしているのではないかしら。今から三年前、ううん、もう四年になるかな、パパに好きな人ができた時、ママはほんとに苦しそうだった。朝、起きて来たときとか、夕方ユミが学校から帰ってきたときなんか、ママの目が腫れていることがあって、それを見るのが辛かった。

でもあの頃、パパは元気そうだったな。それまで見たこともないくらい明るくて、ユミともいろんな話をしてくれた。絵の話とか、歴史の話とか、おとなに話すように話してくれるのが嬉しくて、だからユミはパパが前より好きになっただくらいだ。

ある日、ママが言った。

「ねえ、ユミ、もしパパとママが離婚したら、どう思う？」
そんなこと考えたこともなかったから、すごくびっくりした。心臓がズキン！と鳴った。

「離婚：、するかもしれないの？」

聞き返した声がかすれていた。ママは何も言わずに首を傾けた。それからしばらくして、

「パパに好きな人がいるらしいの。でも、まだどうなるかわからないし、ユミちゃんは心配しなくてもいいのよ」

心配しなくてもいいって、気になることだけ言っておいて、そんな言い方はないでしょ。その時オオミは思った。それきり黙りこくって自分の考えにこもってしまったママに、腹が立った。そんなふうにも暗い顔ばかりして、わけの分かんないことを言ったり、泣いたりするから、だからパパもいやんなっちゃうんじゃないの。ママが悪いんだ。そう思った。

会ったこともない田上さんの奥さんとあの時のママといっしょにするわけじゃないけれど、田上さんの奥さんだつて、ご主人がほかの人といっしょに暮らしているのを平気でいるわけじゃないだろうと思う。なんかママと重なって、

土に眠る (4)

ユミもちよつと辛い気がする。

ミサキさんはハンドルを握りながら、タン・タン・タン・タン・タリ・タ・リラリララー、勇壮なりズムで口ずさんで、ごきげんだ。

「知ってる? 『アルルの女』のファランドンール。もともとこの地方の民謡なのよ」

アルルと言えば、ビゼーの『アルルの女』。そのくらいはユミでも思いつく。高校の音楽の教科書の「鑑賞」という頁に出ている、聴かされたから。でもそれ以上のことは知らない。なんか、けたたましい曲だなと思った覚えがあるけど、でもそんなこと音楽家のユキさんには言えない。だから黙ってる。

アルルはこじんまりした町だった。のどかな町並みのはずれに石造りの、どでかい円形闘技場がある。ローマ時代の遺跡なのだそう。街のスケールと比べれば大きいけれど、人気ない観覧席に立って見渡すと、思いの外に小さい。

「そうかあ、これがアルルの闘技場アレックスかあ」

ミサキさんは腰に手をあてて、感慨深げに首をふった。

「『アルルの女』の主人公の男はね、この闘技場でたった一度その女を見かけたんだよ。でも、そんな都会の女は嫁にできないって親に反対されて、それでも、どうしても諦めきれずに死んじやうんだ」

親に反対される恋。親の反対って、とても重い。ナオミの胸の奥が、またかすかに痛む。

「小説だと、アルルってすんごく大きな都会みたいなのよ。ジャンはね、諦めようとするんだけど、でもできなくて、畑仕事が終わった夕方、アルルの町のほうに歩いてくの。で、夕焼けのなかに日本の教会の尖塔が立っているのが見えるところまで来ると、立ち止まった。けっしてそれ以上は行かなかつた。感動的じゃない? でっしょう?」

うん、かもしれない。でもミサキさんの言うほどじゃないかもしれない。

土に眠る (4)

闘技場から出て、近くのカフェに入った。おなかのどっぶりしたおじさんが、テーブルに寄ってきて、お腹をなでながら、何も言わずに立っている。

「サンドイッチ、ハムのね。それとビール」

ミサキさんが注文する。おじさんは、ちよつと首をかしげて、

「ハム。ふむ。チーズもあるよ」

「ハムがいいわ」

「ハムね。ふむ……。サラミもある」

「でもハム」

「ハム。ふむ」

おじさんは小さく何度もうなづきながら立ち去った。

サンドイッチを待つあいだ、ミサキさんとユミはガラス戸越しに外を見ていた。道は閑散として、ほとんど人影がない。デイジョンよりもっとのどかな町並みだ。と、ミサキさんが頓狂な声を上げた。

「ね、ね、あれ見て」

指さすほうを見ると、さっきのおじさんが歩いていく。

そして、通りの向こうの食料品店へ入った。

「きつとハム買いに行ったんだよ」

ミサキさんが目をまん丸にして言う。

しばらくして出てきたおじさんは、手に小さな包みを持っていった。

「レストランで出てくるのが遅いとき、買いに行ったんじゃないの、とか言うじゃない。でもほんとに買いに行ったのを見たのははじめてだ」

やがて注文のサンドイッチが出てきた。新鮮なハムがたっぷり入っていた。おじさんはさっきと変わらない穏やかな顔で、おなかを小さくボンと叩いて「ボナペティ」と言った。

サンドイッチはとてもおいしかった。ハムがすごく新鮮だった。

土に眠る (4)

(初出 ホームページ「佐々木涼子の部屋」二〇一九年八月)